

# 湧水とせせらぎ／緑と花が美しいまち並み 富士山麓のスマートで暮らしやすい幸せ実感都市

「暮らしやすいまち」は  
誰もが「暮らしてみたいまち」

地域の最東端が神奈川県箱根町（芦ノ湖畔側）に接し、北西方面に日本の象徴・富士山の雄姿を常に（晴天時）仰ぐ三島市は、伊豆半島西側（西伊豆）の玄関口に位置している。

三島市は、昭和11（1936）年に指定された日本を代表する観光エリアの一つ「富士箱根伊豆国立公園（静岡県・山梨県・神奈川県・東京都／伊豆七島）」の真つただち中において、富士・箱根・伊豆の各方面をつなぐ、まさにハブ的な位置にあるまちなのだ。

そうした地理的環境のたまものか、現・三島市エリアには、律令時代（7世紀ごろ）に「伊豆国（現在の伊豆半島全域と伊豆七島）」の国府が置かれ、伊豆国分寺（現在は跡だけ）・国分尼寺（9世紀に焼失、所在地不明）も建てられた。さらに、市域中心部に鎮座する三嶋

大社は、前身の三嶋神を祭る神社がやはり7世紀ごろに成立している。三嶋大社の名も11世紀ごろ、延喜式に「伊豆国一宮」として、正式に記載されるようになったとの説が有力だ。

このように三島の地は、伊豆国の国府のあるまちとして、三嶋大社の門前町として、今日まで継承される都市的基盤が整備された。江戸時代にはその基盤の上に、江戸・日本橋から東海道11番目の三島宿が形成され、人・モノ・情報が交流するまちとして大いに栄えた。その残り香は、現代のまち並みにも、随所に息づいている。

こうした歴史的事実の断片をたどっただけで、三島が古来、文化的にも、地理環境的・交通環境的にも、富士・箱根・伊豆エリアの結節点の役割を果たしてきたことが、自然に納得されてくる。

三島市は現代においても、東京圏と関西圏を結ぶ国道1号線（旧東海道）および、三島市

とよおかたけし  
豊岡武士長  
三島市長



と伊豆半島西海岸・修善寺を結ぶ国道

136号線、三嶋大社を

起点に中伊豆を通り、伊豆半島

南部の下田に達する国道414号線（旧

下田街道）などが交差する、東海地方でも有

数の交通の要衝と位置付けられる。

鉄道交通についても、東海道本線・東海道新幹線のJR三島駅、三島（修善寺温泉

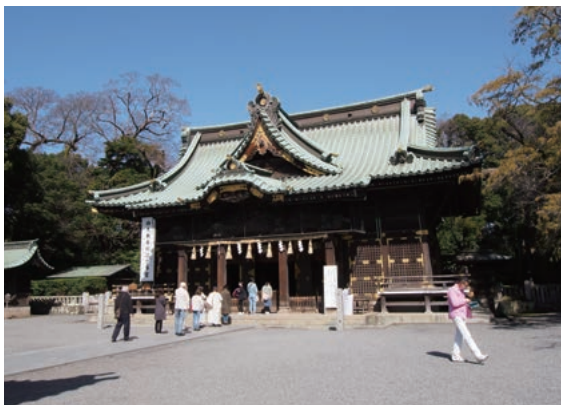
（伊豆市・修善寺駅）を結ぶ伊豆箱根鉄道・駿豆線の起点・三島駅など（駿豆線の駅は市

内に5カ所）がある。

新幹線停車駅の存在は、三島市の産業立



市内各所から雄大な姿を間近にみられる富士山は市民の誇りだ



三島市のまちづくりの核としても機能する三嶋大社



地や観光面において、多大な波及効果の要因を成している。新幹線を活用し、東京・横浜方面への新幹線通勤・通学（ひかり号の利用で新横浜駅まで26分、品川駅まで37分、東京駅まで44分）をする市民も数多い。

また、市域を縦断する駿豆線は、三島市域が満遍なく、バランスよく発展していくのに不可欠なけん引役となっており、西伊豆における鉄道交通の大動脈として、観光面で果たす役割も非常に大きい（※平成30／2018年度の三島市への観光交流客数は775万人、取材時はコロナ禍で減少傾向にあったが、それだけの潜在的な観光需要を擁している）。

このように多様なポテンシャルに満ち、豊かな都市環境に恵まれた三島の地

に、田方郡三島町と錦田村にしきたの合併で、静岡県内6番目の市・三島市が誕生したのは、昭和16（1941）年4月29日（昭和29／1954年には中郷村なかごを編入）のことだった。誕生当時の人口は3万3533人。令和3（2021）年11月3日には、市制施行80周年の記念式典が行われたが、その時点の三島市の人口は10万8401人。取材直後の本年3月末の人口は10万6740人だ。

平成17（2005）年の11万2829人をピークに、年々漸減を続けてきているとはいえ、三島市は市制施行時の3倍以上の人口規模を、今も維持している。全国の都市に共通する課題、人口減少の波の訪れ方も、三島市においては、かなり緩やかといえるだろう。

その背景には、三島市のいろいろな意味で

の「暮らしやすさ」が存在するというのが、関係各方面からの一致した評価だ。

例えば、令和2（2020）年に実施された、民間の住宅ローン専門金融機関大手による調査《本当に住みやすい街大賞2021 in 静岡》では、三島広小路（伊豆箱根鉄道・三島広小路駅周辺）が、第1位にランキングされている。選出理由には、「街としての発展性、住環境、交通便利性、土地などのコストパフォーマンス、教育・文化環境の高さ」が、それぞれ高く評価されている。さらに、令和3年度における静岡県の「市町別移住者数」調査では、三島市が移住先の第1位（年間移住者171人）に輝いている。

コロナ禍が本格化して以降、三島市ではワーケーション需要が活発化し、サテライトオフィスの進出が相次ぐ現象も続いている。



昭和のまち並みが程よく残されている三島広小路駅周辺エリアは市民にも観光客にも大人気

前述した地理的環境の良さ、恵まれた交通環境に、暮らしやすさへの高い評価が加われば、それも当然の帰結だろう。

外側から見た評価だけでなく、既に暮らしている市民の満足度も高い。例えば、三島市が毎年実施している市民意識調査で、特に令和時代に入っからの「市民満足度」が軒並み最高ポイントを更新し続けていることは、注目に値する。直近の令

和4(2022)年度調査で「住みやすい」と回答した市民は、91.6%にも上っているのだ。

「市の内外から、そのような評価をいただいている事実は、私たち三島市の行政を担う立場にある者にとって、非常に大きな励みになります。そして、そのような評価をいただいていることの理由は何かと改めて考えてみますと、例えば私が就任以来、重点施策の3本柱と位置付け、取り組んできたまちづくり事業に思いが至ります。具体的には『美しく品格のあるまちづくり／ガーデンシティみしま事業』と『健やかで幸せなまちづくり／スマートウェルネスみしま事業』、『市民の絆を育むコミュニティづくり事業』です。

これらはいずれも、市民の皆さまが直接参



三島駅南口再開発事業の一環として建設された富士山三島東急ホテル

加し、自発的にまちづくりに関わることでシビックプライドを高め、地域への愛着を深めていただける事業という点で共通しています。手前みそに映るかもしれませんが、そうしたまちづくりへの地道で継続的な取り組みが、効果を発揮してきているのかなと、捉えております」

そう語るのは豊岡武士三島市長だ。三島市生まれの豊岡市長は、昭和41(1966)年4月、大学で専攻した獣医学(市長は獣医師の資格を所持)の知見を生かすべく、静岡県に入庁。農畜産行政を皮切りに消費者行政や防災に関する要職を歴任した後、平成10(1998)年に三島市へ出向、企画調整部長を務めた。翌平成11(1999)年から、静岡県議会議員を計3期務め、平成22(2010)年12月実施の三島市長選挙に出



三島駅南口周辺再開発事業でビルディング4棟が建設予定の「三島駅南口東街区A地区」(バスターミナルの向こう側)

馬し、当選。本年12月で、就任から4期13年目を迎える。

### 四季折々に花が咲き水辺散策が楽しいウォーカブルなまち

今回の取材では、市長へのインタビューに先駆けて、主に三島駅南口側に展開する中心市街地を縦横に歩いての「まち並み取材」を実施することができた。それは同時に「変わらぬ三島市の魅力」と「変わりゆく(発展する)三島市の今」を体感する取材ともなった。

まず、取材の起点となった三島駅南口を中心とする駅周辺エリアでは、豊岡市長就任翌々年の平成24(2012)年に策定した「三島駅周辺グランドデザイン」に基づく大規模

# 三島市

市 政 ル ポ

(静岡県)

な再開発事業が、継続的に実施されている。

駅前広場を挟んで、東西に広がる市有地に一部民有地を合わせたエリアが再開発の対象地で、西側のエリアには令和2年6月に、《富士山三島東急ホテル》(敷地面積約3400㎡、地上14階)が竣工・開業している。この事業は「三島駅南口広域観光交流拠点整備事業」として公募を行い、平成28(2016)年12月に、東急電鉄と東急ホテルズが事業者を選定されていた。

また、市内各所や西伊豆、さらには箱根芦ノ湖や富士五湖方面にも向かうバスの大ターミナルとなっている南口駅前広場を挟んで東側に広がる、総計約1万2700㎡の「三島駅南口東街区A地区第一種市街地再開発事業区域」と「B地区/定期借地事業区域」を合わせたエリアでは、駐車場などとして現在利用されているA地区(約1万100㎡)に、商業施設・公益施設(医療・子育て施設)・オフィス・分譲住宅などの用途を持つ4棟のビルディング(地上6階/24階)が建設される。A地区に隣接するB地区(約2600㎡)部分には、商業施設やホテルなどの建設が現在検討されている。

A地区の再開発は、市を含



楽寿館と小浜池。小浜池は満水時には青々とした湧水をたたえ、水枯れの時期には水底の溶岩流が観察できる



ジオサイトにも指定されている「富士の噴火で生じた溶岩流」の痕跡(楽寿園内)

めた多数の土地所有者や不動産会社を組合員として設立された市街地再開発組合により、本年度中の着工と、令和9(2027)年度の竣工が発表されている。また、B地区では、市街地再開発組合の一員であるミサワホームが三島市から土地を借り受け、複合施設の建設と運営を行うことが決まっている。

「三島駅南口周辺地区の再開発事業は、高次都市機能を備えたフロントエリア(玄関口)として、三島駅前に新たな人の流れを作ることが、まず期待されます。同時に、中心市街地方面への回遊性を高め、大きな経済波及効果をもたらしてくれる流れの起点、駅前《顔づくり》として、現在から近未来

にかけての三島市のまちづくりの方

向性を決める、一大事業と位置付けております」(豊岡市長)

本年度内の着工なので、取材の時点(本年3月7日)ではもちろん、まだ工事のつち音は響いていなかった。しかし、市長の談話にもある通り、既に新たな観光交流の拠点として稼働している富士山三島東急ホテルと合わせて、前述の東街区A地区・B地区が竣工したら、三島駅南口の様相がガラリと変わるだけでない。中心市街地全体の「人・モノ・情報」の流れが、経済波及効果が伴いながら、一気に活性化していくことが、容易に想像できる。

そんな三島駅南口周辺の再開発計画と連動して、駅前を起点とする各種の新たな流れを受け止め、共鳴しながら、新たなにぎわいを創造していくための計画と位置付け



まちを彩る四季折々の花壇は、老若男女の市民が育み整備している（ガーデンシティみしま事業）



三島市の中心市街地には湧水の水辺空間が随所に見られる

られるのが、令和4年策定の「三島市まちなかりノベーション推進計画」だ。

同計画は、三島駅前に立地して、市民にも観光客にも憩いの場として人気の広大な市立公園《楽寿園》から、年間を通じて参詣者の絶えない三嶋大社、前出《本当》に住みやすい街大賞2021in静岡で第1位に輝いた広小路町（伊豆箱根鉄道・三島広小路駅周辺）などの中心市街地までを面的につなぎながら推進する、中心市街地再活性化のための基本シナリオだ。

「三島市まちなかりノベーション推進計画」に基づく具体的な事業は、これから細部に

詰める必要がありますが、要は三島市の中心市街地を形成する三島駅、楽寿園、三島広小路、三嶋大社を結んだエリアにさらなる付加価値を加え、にぎわいをより高めていく仕掛けを、多角的に考え、実行していくとする計画です（豊岡市長）

この計画の基盤は一にも二にも、楽寿園と三嶋大社の存在、さらにはその周辺で随所に見られる美しい水辺風景や緑陰風景ではないだろうか。冒頭に述べたように、三嶋大社は中世以前からこの地にあつて、都市としての三島市の基盤（核）を形成してきた。

敷地面積約7万8379㎡に及ぶ楽寿園も、明治23（1890）年に皇族・小松宮彰仁親王の別邸が造営されて以来、三島のランドマークとして機能してきた。楽寿園は紆余曲折の末、昭和27（1952）年に三島市が購入。同年7月に公園化、一般公開されるようになった。園内には動物園や遊園地が併設されているほか、旧小松宮彰仁別邸時代に造営され、彰仁親王没後に引き継いだ韓国王世子の別邸（昌徳宮）としても使われた建物が、「楽寿館」（静岡県指定文化財、三島市指定文化財）として保全されている。

さらに楽寿園内は、伊豆半島が形成される過程で起きた火山・造山活動の証しとなる三島溶岩流（約1万5000〜1万7000年前の富士山噴火で発生）の痕跡が随所にある、伊豆半島ジオパークのジオサイトにも指定されている。文化的価値はもちろん、

伊豆半島の自然環境を象徴する風景を垣間見ることもできるのだ。

この楽寿園と、創建から1000年近くが経過しているとされる三嶋大社（実際の創建年は不詳）をつなぎ、三島広小路方面を包み込むエリア一帯は、前述のように緑と水と花の楽園だ。

折しも各町内に遍在する、通り沿いの花壇では、ガーデンシティみしま事業の担い手であるボランティアの人々による、花の手入れが行われていた。富士の雪解け水が伏流水となり、三島市内には随所で湧水（楽寿園の小浜池から湧く源兵衛川、菰池公園や白滝公園から湧き出す桜川・御殿川など）が見られる。

そこからの流れに沿って縦横に延びる散策路を彩る花壇は、ひととき華やかだ。花壇を手入れする地域の人々の表情も、わがまちの美化に参加することの喜びや、充実感に満ちあふれているかのようだった。

### まちづくりの未来図は「スマート市役所」の構築から

このように多彩で魅力的なエリアで展開される「三島市まちなかりノベーション推進計画」は、駅周辺の再開発計画の進捗と連動・連携していくことで、より多様な相乗効果が生まれてきそうだ。実際、計画区域のほぼ全てを歩いてみた感想は、花と緑と

# 三島市

市 政 ル ポ

(静岡県)



民間企業がコラボで設置した「LtGスタートアップスタジオ」は、三島市での起業を希望する人向けのインキュベーション施設

清水に彩られ、まさに歩いて楽しい「ウォークアブルなまち」の一言に尽きる。そして「歩いて楽しいまちづくりは、市民の健康を促進する《スマートウェルネスのまちづくり》の基盤」（豊岡市長）でもある。

周知のように「スマートウェルネス」とは、本欄でもこれまで幾度となく事例が出てきたように、全国約120の市区町村が参画する「スマートウェルネスシティ首長研究会」が打ち出している、ウェルネスを中核に据えたまちづくりの理念だ。三島市は同研究会に、豊岡市長就任翌年の平成23（2011）年から参加している（全国で19番目）。

また三島市では、令和元（2019）年12月、Society5.0 社会の実現やSDGsの取り組みに対応するため、AIやIoTなどの先端技術やデジタルデータなどを積極的に活用する「デジタルファースト」の態勢を構築し、《スマート市役所》づくりの実現・推進を誓う宣言を行った。

三島市における、スマート市役所づくりを推進するためのデジタルファースト戦略には、まず、デジタル戦略課を発足させ、

窓口サービスのオンライン化などを推進する「①市民サービスのデジタルファースト」の取り組みがある。さらに、デジタルマーケティングの実践をはじめ、効率的で生産性の高い行政運営を目指す「②行政運営のデジタルファースト」、デジタル人材の育成や産官学民が連携してデータ連携基盤を活用するスマートシティの推進などを目指す「③まちづくりのデジタルファースト」の三つに分類されている。

これらスマート市役所づくりに向けた取り組みは、本稿で紹介してきた各種まちづくり施策にも随時、連動・連携しながら、既に導入されつつある。コロナ禍がようやく落ち着きを見せ、まちに再び活動的な空気が戻ってこようとしている現在、三島市における各種の地域活性化施策・事業も、一斉に再活性化し始めているのだ。

「昨年8月、コロナで中止が続いていた《三嶋大祭り》が3年ぶりに復活し、熱狂的な雰囲気の中で遂行され



昨年8月、頼朝公旗揚げ行列で有名な「三嶋大祭り」が3年ぶりに復活（写真は祭り前の「農兵節」と「当番町山車競り合い」）

ました。これがきっかけになって、三島の再活性化にさらに勢いがつくものと思っ「す」と豊岡市長。三嶋大祭りの主役は、いうまでもなく、源頼朝が平氏打倒と源氏再興を目指し、出陣した際の様子を再現する「頼朝公旗揚げ行列」だ。

「三島駅南口周辺再開発」の遂行、「三島市まちなかりノベーション推進計画」の開始、さらに「スマート市役所づくり」の推進も含め、コロナ禍明けに、同時に本格化していくとするこれらの動きは、実際、三島市が近未来に向け、自らのバージョンアップを宣言する「旗揚げ」だったと、後世評価される取り組みになるのではないだろうか。

（取材・文＝遠藤隆／取材日＝令和5年3月7日）